想いを綴る
心の旅

連載
第17回

発想の転換と、馴染むということ

理事長　北岡賢剛

今回は、障害者の相談支援事業のことを書いてみたいと思う。平成6年のことだから、もう20年も前の話になる。今となっては、障害者の相談支援事業は制度に位置づき、基幹型や計画相談、一般相談等、現場はいささか混乱している感は拭えないが、20年前に始まった時に議論されていた方向性は、変わらずに示されている。

障害者相談支援事業は、「心身障害児(者)地域療育等支援事業」(コーディネーター事業)や、「知的障害者生活支援事業」(生活支援ワーカー事業)等の名称で、国の補助金で行われていた。当時私が勤めていた法人もコーディネーター事業に取り組んでいたので、ここでは、そのことについて書きたいと思っている。コーディネーター事業は、在宅で暮らす人たちとその家族のニーズを聴き、療育をはじめ、生活を送る上で必要なサービスにつなぐということを行ってきた。既存のサービスで対応できないことがある場合には、新たに必要なサービスを生み出すという役割も担っていた。本人が家族と共に暮らすために、時として、家族の「都合」を支えることも必要となった。

一方、生活支援ワーカー事業は、グループホームや地域で暮らす本人の相談がその中心であったが、時には外出支援など、サービス提供を行うマンパワーとして、その役割を果たすことがあった。この二つの相談支援事業の登場は、グループホーム制度ができた時のインパクトと同様に、障害者の地域生活を支える上で大きな役割を果たすものと、誰もが期待をしていた時代であった。

コーディネーター事業は、入所施設が持つ機能を、地域で暮らす障害(児)者により積極的に利用してもらうために、窓口(コーディネーター)を明らかにして、施設と利用する人との調整を行うものとして始まった。ショートステイがその主なサービスであった。

私はこの事業を受託したくて、滋賀県庁に熱心に働きかけていた。当時、私が県庁に足を運び「私の法人に……」等と話をしていたのだが、その頃の私は、主任指導員だった。今思えばそんな立場で、しかも勤めている法人の意思決定もない中、自分だけの意思で、良くも県庁まで足を運んだものだと思う。県の担当者は、戸惑いながらも、私の話を聞いてくれた。県内で幾つかの法人も手を上げたようだったが、結果として、国の採択により、私たちの法人が実施することになった。

この事業を実施することは、新しい時代の幕開けという感じで、実施する施設は、地域福祉に取り組んでいるという印象があった。時代は措置制度で、地域での暮らしを支えるサービスは、皆無だった。ショートステイ制度もメニューとしてはあるものの、施設側の都合で断られることが多く、利用はないに等しかったし、ホームヘルプサービスも同様だった。移動支援はまだ制度になっていなくて、入所施設か通所施設かのサービスのみだった。

さて、当法人の中島秀夫理事は、私が先のような動きをしていた時も同じ法人に勤めており、もうかれこれ30年以上の付き合いとなる。このコーディネーター事業が始まった時、中島さんが事業の担当となった。平成7年のことである。それまでは、陶芸班の担当だった。生まれも育ちも信楽町と言うこともあってか、中島さんは陶芸に対する知識が豊富で、もう随分長いこと陶芸を通じて、障害のある人たちと社会の接点作りに取り組んでいた。その中島さんに、この事業を担って欲しいという話をしたのは私だった。これまた特に人事権があったわけでもないのに、私としては中島さんしかいないと思っていた。

中島さんは、とにかく人の話を良く聴く人だった。障害のある人の話は勿論、家族、職員、楽しい話もそうでない話にも熱心に耳を傾けていた。そして、中島さんを苦手だという人は見当たらなかった。私は中島さんに、ノーマライゼーションのことや、障害のある人が地域で暮らすことの夢、そしてその夢を実現する上で、いかに相談支援が大切であるかということを話した。中島さんは、いつものように丁寧に私の話を聴いてくれたが、なかなか「うん」と言わなかった。「そんな難しいことは、私にはできない」と言うばかり。そんな中、施設の製品である陶板を二人で埼玉まで納品に行くことになった。往復の車中で、私は引き続き喋り続けた。何故、中島さんがこの仕事に適任であるかということを。10時間を越える、まるで洗脳の様な時間は、中島さんにとうとう「やってみようか!」と言わせた。

相談支援事業に取り組むに際して、二つのことを決めた。一つは、利用者の悩みやニーズを聴く仕事なので、相談しやすい場所と時間は相談者が決める。それからもう一つは、中島さんの働きぶりの評価は、施設では行わず地域の人たちが

行うようにする。そのために、中島さんの活動報告をする会議を、地域の中に作るというものであった。この会議、今では地域自立支援協議会(協議会)として、障害者総合支援法に位置づいているが、施設の朝礼と会議には出席しないで、自宅から訪問先に出向くというアウトリーチ型の相談支援と、地域から見れば他の施設職員を評価するというこの取り組みが軌道に乗るまでは、時間がかかったように思う。中島さんにとっても、何処に帰属感を持っていいのか、理屈と実際との間が落ち着き、自分の居場所を見つけ出すのに要した時間も同じだったと思う。さらに、この事業を側面的に支えている私たちも「なんかいつもいない人」という、この空気感に慣れるまでに時間がかかったように思う。このスタートから数年後、この方法は全国から評価を受け、「甲賀モデル」と呼ばれるまでになった。

一緒に働く職員のチームワークも良く、コーディネーター事業を受託している法人としての誇りみたいなものが生まれていたように思う。地域福祉という新しい福祉のあり方に向かっているという確かな手応えがあった。

平成8年には厚生労働省科学研究班(高松鶴吉主任研究)に参加して、このコーディネーター事業の実態調査を行うことになった。現在、当法人の評議員である笠原吉孝医師が分担研究者を務められている研究チームで、私と長野の福岡寿さんがこの調査を担当した。笠原先生は当時、滋賀県立小児保健医療センター所長であり、先生の研究チームでは、医療サービスを含めた療育についての研究も行われることになっていたため、そのチームの研究者は、地域の中で療育に取り組んでいた気鋭の医師ばかりが顔を揃えていた。

福岡さんは、長野県飯山市でコーディネーター事業に取り組んでいて、彼が書いた「施設の機能を地域に開く」(日本知的障害者福祉協会研究誌『愛護』掲載)という文章に惹かれ会いに行ったことがあったので、どういう人かは知っていた。そもそもこういう研究班に、当時30代だった私たちが参加するのは前代未聞だったらしく、高松鶴吉先生の英断だったと聞いた。「これからの障害福祉には若い人たちの力が必要」とのことで、同じ「高松班」の別のチームには、曽根直樹さん(現在・厚生労働省障害福祉専門官)や、田中正博さん(全国手をつなぐ育成会連合会統括)も参加していて、レスパイトサービスについての研究を行っていた。

私たちの研究は、コーディネーター事業を実施している法人に対して、調査を行うことだった。詳細な調査結果については、紙面の都合上、報告することは難しいが、事業を実施していた約8割が、施設の中の仕事を兼務していたという実態が浮き彫りになった。「やらずぼったくりではないか」と、福岡さんと嘲笑したことを覚えている。施設で働く職員が休んだ時のスペア的な要員としてこの事業を受けていると言われても仕方がない状況であった。国の補助金700万円を受け取っていながら宿直をし、日中のプログラム(日課)にも参加をしていたということが詳らかになった。

こんなにも考え方に開きがあるのかと愕然とした。「職員朝礼に来ないでいい」、「仕事ぶりの評価は施設では行わない」という私たちの考え方が、これから拡がるべきではないかと、こういう調査結果の中で、めらめらとファイトが沸いてきたことを覚えている。

今、相談支援事業は、当初期待されたとおり、障害のある人の地域生活を支える上で大きな役割を果たしている。平成15年度に補助金から一般財源となり、全ての市町村で取り組まれるようになった。近年では、厚生労働省の職員の情熱で、全ての障害福祉サービスを利用する人たちにサービス等利用計画を作成するなど、相談支援とサービスの関係はより密接になってきた。ショートステイ機能を地域で暮らす人たちへ提供することだけで、あたかも地域福祉を創造しているかのようにされていた時代とは、様変わりをした。

相談に対して、つなぐサービスも障害者総合支援法で格段に整備され、様々な課題はあるにせよ、主立った予算は、政府が責任を持つ義務的経費となり、措置の時代と比べると4倍ほどの予算となった。平成30年度の報酬改定に合わせて、地域において相談支援体制の核となる主任相談支援専門員も新しく位置づくという。あの頃、中島さんと描き、実践してきた相談支援のあり方は、人材育成と言う課題はありながらも、着実に定着してきたと言っても良いと思う。

この原稿、すっかり遅くなってしまって、担当の髭真歩さんにご迷惑をおかけした。お正月に書き上げる予定が、アメニティーフォーラムがあったりで、こんな時期になってしまった。

昨年、忘年会で出会った若い職員たちのことも最後に少し書いてみたいと思う。精神保健福祉士の資格を持ち、精神科病院での実習の際に出会った風景について、幾つか問題意識を感じながらも楽しそうに私に話してくれた人がいた。大学院生の時から、週に一度、ボランティアとして私たちの法人の施設に訪問してくれていたという人とも出会った。二人の話からは、障害のある人たちとの関わりに興味を持ち、前向きに支援を楽しんでいるということを感じることができた。当たり前のことだが、やっぱり現場で出会う職員たちに励まされる。

500人を越える職員集団となれば、理事長など遠い存在なのかも知れない。しかし、こんな風に出会って話をする機会を作ろうと私なりに努力もしている。いつか忘年会や何らかの会で相談支援事業の歴史など、話をしてみたいと思う。私たちの取り組みから、新しい仕組みができたことを伝えたいと思う。

そして、今も中島さんは相談支援事業の担当理事として老体に鞭を打って、夢に向かって頑張っている。